

那須塩原市議会 「公明クラブ」

行政視察報告書



視察期間：令和5年1月30日（月）～2月1日（水）

- I 視察日：1月30日（月）
視察地：大分県別府市
内 容：ツーリズムバレー構想について
- II 視察日：1月31日（火）
視察地：山口県岩国市
内 容：いこいと学びの交流テラスのまちづくりについて
- III 視察日：2月1日（水）
視察地：大阪府箕面市
内 容：認定 NPO 法人 コクレオの森 当該法人の活動について

参加議員：田村 正宏 星 宏子 星野 健二 鈴木 秀信

「別府ツーリズムバレー構想」について

視察地 大分県別府市

視察日 令和5年1月30日

報告者 田村 正宏

■地勢

別府市は、人口 11 万 5 千と那須塩原市と同程度の規模であり、九州の北東部、瀬戸内海に接する大分県の東海岸のほぼ中央に位置し、南は野生のニホンザルで有名な高崎山をへだてて県都大分市と隣接、北は県北・国東テクノポリス地域としてハイテク関連企業が進出する国東半島の市や町と接し、西は阿蘇国立公園に属する由布岳、鶴見岳の連山を中心に南北に半円形に連なる鐘状火山（トロイデ）に囲まれその裾野がなだらかに波静かな別府湾に続く扇状地である。市内には、古くから「別府八湯」と呼ばれる温泉群が点在し、2 千 8 百を数える源泉から湧出する温泉は、毎分約 1 0 万 3 千リットルにも及び、医療、浴用等々、市民生活はもとより観光、産業面にも幅広く利用されている。

■別府ツーリズムバレー構想策定の背景

別府ツーリズムバレー構想は、別府の基幹産業である観光産業の活性化を図り、別府市総合戦略の基本目標に掲げる「儲かる別府」に進化するための政策「別府ツーリズムバレー」を別府全体で力強く進めていくための施策などを示すものである。この構想に基づき、別府市内の商工業団体、金融機関、大学・教育機関などが連携して「別府ツーリズムバレー」を推進していく。近年、別府を新たな観光ビジネスの拠点として、国内外の高級ホテルから一軒家をリフォームしたゲストハウスまで、多様で幅広い層の旅館

ホテル等が進出してきておりまた、多様な観光客をターゲットとして、都心等でのビジネスモデルを活用した新たなビジネスを展開する企業の進出も進んでいる。他方、別府市には、別府大学、別府溝部学園短期大学、立命館アジア太平洋大学、京都大学、九州大学の 5 つの大学、大学研究機関がある。全体で約 8,800 人もの学生が在籍しており、そのうち海外からの留学生は、約 90 か国から約 3,300 人が在籍しているなど、国内外から若い優秀な人材（人財）が集まっている。また、これら 8,800 人の学生は、別府市の 15 歳から 24 歳の人口の 66.7%を占めており学生の割合が非常に高くなっている。市内にある 5 つの大学における国内外の優秀な学生の存在は、別府市の人口が減少する中、継続的に若い世代の人口の流入に寄与しており、このことは他の地域にはない別府の大きな特色であるといえる。このように別府市に複数の特色ある大学、これからの産業を担う多くの学生の存在など、他市町村にはない、大きな特色と強みがあり、そうしたことが「別府ツーリズムバレー構想」策定の背景となっている。

■別府ツーリズムバレー構想の取組

スタートが令和2年1月ということで、コロナ禍と重なったため、本格的な推進はこれからであるものの、現在までに「起業・創業等、新たなビジネスを生み出す場（機会）の取組み」「別府（温泉）全体をキャンパスにした学び・実践の場の創出」「別府に関わるヒト・企業とのネットワーク構築」「ワーケーション発信事業」など様々なイベントや事業を実施している。

■考察

別府市は、人口規模や観光が基幹産業であることなど那須塩原市との共通点も多く、先進事例として参考にすべき点は多いものの、本市との決定的な違いは、市域がコンパクトなことである。そのことによる行政上のメリットは大きく、本市においても「多極ネットワーク型コンパクトシティ」への移行スピードを加速させる必要があるのではないかと。また、「別府ツーリズムバレー構想」成功のカギは民間活力の導入であり、既に、多くの大企業とのコラボ事業や「企業版ふるさと納税」による資金調達も図られている。今後、那須塩原市の持続可能性を高めるためには、発想の転換と官民連携が重要であることを痛感した。



福祉・交流まちづくり構想について

視察地 山口県岩国市

視察日 令和5年1月31日

報告者 星野 健二

岩国市は、近年の高齢化の社会保障の増大等により、市民の健康福祉に対する意識が高まっていることを受け、第二次岩国市総合計画において、「子育てといきいきとした暮らしを応援するまち」を基本目標の一つに掲げ、出産・子育て支援や高齢者支援などの充実を図り、誰もが健康で元気に暮らせるまちづくりを推進している。さらに、岩国市は米軍基地が所在する自治体として「基地との共存」によるまちづくりの必要性を掲げている。平成19年11月に岩国医療センターの移転に伴い、岩国市と山口県と岩国医療センターの三者協議での合意を踏まえ、平成22年度より様々な見地から計画地におけるまちづくりの可能性の検討を行なった。平成27年に計画地におけるまちづくりの方向性を「市民が安心していきいきと暮らすことができる福祉のまちづくりとして活用する」と示し、平成28年度から基本的な方針や土地利用計画の検討を進めた。まちづくり構想の検討にあたっては、岩国市総合計画や分野別計画など、上位・関連計画との整合性を図るとともに、広く意見を伺うために、市民アンケートや事業者ヒヤリング等を実施しまた、黒磯地区交流拠点づくり構想策定検討委員会を立ち上げ、地元で意見交換会を開催して様々な意見や提言を頂きながら進められたようである。

「誰もが支えあう地域支援と交流のまち」を基本方針とし岩国医療センター跡地を福祉・科学学習施設を核として、ふれあい交流施設、自然交流施設、健康増

進施設などを配置した総合的な福祉交流の施設の建設を計画された。

○福祉・科学学習施設

相談など総合的な福祉活動を行う福祉センター機能や科学センター機能を配置。

○ふれあい交流施設

屋内施設と連携した各種イベントを行う芝生広場や展望デッキを配置。

○自然交流施設

高低差を利用した自然体験学習やビオトープなど、科学センターと一体的な学びの機能を配置。

○健康増進施設

多目的広場を利用した様々なスポーツ活動やウォーキングやジョギングなど、また、災害時におけるボランティア活動拠点の臨時駐車場などに利用可能となる施設。



基本設計概要

- ・整備面積 10ha(外周道路等を含む)
- ・施設面積 $A \approx 7,700 \text{ m}^2$ (地上2階建て)
- ・イベント広場 約 $2,000 \text{ m}^2$
- ・多目的広場 約 $90\text{m} \times 120\text{m}$
- ・ウォーキング・ジョギングコース
- ・展望デッキ 約 $10\text{m} \times 15\text{m}$
- ・自然観察施設(ビオトープなど)
- ・駐車場 約 250 台

施設整備については、財政面や市民ニーズなどを考慮し、検討を進めながら 2025 年の完成を目指している。

本市においても、旧黒磯清掃センター跡地や新庁舎完成後の現庁舎敷地の有効利用を市民アンケートなどを取りながら、市民のニーズに答えられるように活用していくべきと強く感じた。



愛宕スポーツコンプレックス野球場

福祉・交流まちづくり構想について

視察地 山口県岩国市

視察日 令和5年1月31日

報告者 鈴木秀信

岩国市は、平成26年の岩国和木豪雨災害を受け市の災害復旧を支援する人材やボランティア活動の課題解決、米軍関係者との交流促進を目的としたまちづくりを掲げ「福祉・交流まちづくり構想」を策定しています。

地域資源を活かした福祉・交流拠点の整備計画は、本市の今後のまちづくりの参考になるのではないかと公明クラブは考え、視察を行いました。

まちづくり構想は、平成19年11月の岩国医療センターの愛宕山地区移転に伴う跡地利用問題が発端となっています。



計画地位置図



計画地航空写真

1 福祉・交流拠点の基本方針

(1) まちづくりの将来像

岩国市が将来にわたって、活力あるまちであり続けるためには、誰もが生きがいに満ちあふれ、充実した生活を送るための環境や体制の整備が必要と考えています。そのために市民一人ひとりの健康と生きがいづくりを推進するとともに、包括的な支援体制の充実や、地域全体で支える意識の醸成を図り、福祉やボランティア人材の育成・確保のための取組が必要となっています。

また、将来を担う子供たちへの遊び・学びの場の環境整備や、誰もが安心して子育てができる環境の充実を図るとともに、世代を超えたつながりや交流が求められるとしています。

これらの取組を推進する中で、外国人を含め市民一人ひとりが身近な交流や絆を培い、誰もが共に支えあい助けあう「まちづくりの将来像」の実現を目指しています。テーマは「～誰もが支え合う 地域支援と交流のまち～」です。

(2) まちづくりの将来像を支える基本理念

① 生きがい・自立・共生の場づくり

- ・高齢者や障害者の方が社会の一員として活躍できる場を創出します。
- ・関係機関との総合的な調整により、包括的な相談支援に取り組む場所を創出します。
- ・災害ボランティアをはじめ、様々なボランティアの活動を支援する場所を創出します。

② 遊び・学び・育てる場づくり

- ・子どもの成長段階に応じた遊びや学習の場を提供し、親子や子育て家庭同士のふれあいの場所を抄出します。
- ・交流や体験などを通じて、子育て力を高める場所を創出します。
- ・子供や若い世代をはじめ、福祉・ボランティア人材を育成する場所を創出します。

③ 憩い・安らぐ・交流の場づくり

- ・瀬戸内海への眺望に優れた雛壇場の形状を活かし、自然とふれあう憩い・安らぎの場を創出します。
- ・市民と外国人が活発な交流を行い、友情や絆が生まれるシンボリックな

場所を創出します。

- ・世代を超えた様々なイベントや催しが開催できる交流の場を創出します。

④いきいき・健康の場づくり

- ・自身の健康について相談ができ、安心して医療サービスが受けられる場所を創出します。

以上4つの基本理念を掲げています。これらは市民アンケート調査、事業者ヒアリング調査、構想策定検討委員会での意見などを基に決定しました。

2 施設整備計画

(1) 施設配置の基本方針

- ①瀬戸内海の眺望に優れた敷地形状を活かし、建築物と屋外空間が有機的に連携した施設配置を行います。
- ②国道188号やJR藤生駅方面からのアクセス方法に考慮し、計画地内の高低差を造成やバリアフリー動線の整備によって処理するなど、拠点にふさわしい交通インフラのリニューアルを行います。
- ③関係する法規制に対応するとともに、周辺地域の生活環境に配慮した、環境整備や施設配置を行います。
- ④岩国南バイパスの南伸の事業化にあたっては、計画地へのアクセス方法等についての検討を行い、必要性等を含め関係機関との調整を行います。



施設配置のイメージ図

3 事業計画

整備スケジュールは下表のようになっています。

項目	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度以降
調査	地形測量等				
	土質調査				
	路線測量等				
主設計	実施計画				
	詳細設計				
副設計	実施計画				
	詳細設計				
工事					

この表からは平成33年度着工予定となっていますが、新型コロナウイルスの影響を受け、未着工となっています。

今回の視察における所感

岩国市は、米軍基地を抱える自治体で、国からの補助金も潤沢にあり、本市とは事情が大きく違っていています。事業内容を本市に導入することは難しいですが、市の実状や特色を基盤にした計画立案や市民の意向を重視する姿勢は大変参考になりました。



岩国市役所前で

「みんなで創るミライの学校プロジェクト」コクレオの森について

視察地 大阪府箕面市

視察日 令和5年2月1日

報告者 星 宏子

認定NPO法人コクレオの森は、「誰もが自分らしく生きられる社会」、「平和で持続可能な社会」を創ることを目指してオルタナティブスクール「箕面子どもの森学園」を運営する「こどもの森」、対話の文化を広げる「おとなの森」、親と子の幸せを支援する「子育ての森」、民主的な学校づくりや持続可能なまちづくりを支援する「ミライの森」、の4つの活動を行っています。

その活動の一つである「箕面こどもの森学園」を視察しました。2015年「持続可能な社会の担い手を育む教育を行う学校」として、UNESCOから認定を受けています。現在の在籍者数は小学部46名、中学部20名、卒業者数小学部60名、中学部18名。1学年8名で、1年生から3年生が一クラス、4年生から6年生が一クラス、中学生が一クラス異学年混合クラスで構成しています。在籍者数の約4割が他自治体より転入し当学園で学んでいます。

コクレオの森学園は、主体的に学ぶことをモットーに民主的な学校運営を目指しており、子どもの興味・関心を学習の中心にすえ、子ども自身の生活から学習を組み立てるフレネ教育やイエナプラン教育の考えと方法を取り入れています。また、自由・平等・自他尊重といった民主的な価値観を共有し、生活のルールや行事は子どもたちとスタッフが話しあって決め、行事のほとんどは子どもたちが中心となって企画から運営まで行っています。

小学部は基礎学習の「ことば」と「かず」、テーマ学習、プロジェクト、選択プログラムで時間割を構成し、子どもたち自身が何を学ぶか自分が何をしたいのか主体的に考え決めています。低学年の「ことば」の学習では、自分の意見とは違う意見を聞いたうえで自己表現をする学習、車座になり一人ひとり発言することに耳を傾ける学習ののち、テーマについて協議をする学習でした。テーマは「ペンのキャップを閉め忘れている人がいるので閉められるようになるにはどうしたらいいのか」でした。3年生が司会と書記と板書をし、1年生は3年生の姿を見て、人の意見を聞き、自分の意見を言うこと、また話をまとめていく学習が自然に身についていきます。日常生活の中での課題の気づきが大切であるため話し合いのテーマも子どもたちが決めています。

高学年は修学旅行のまとめと良かった点と悪かった点の課題の抽出。修学旅行の費用は自分たちでフリーマーケットや地域のお祭りに参加して稼ぎ、旅行のタイムスケジュール等や交通費はすべて子どもたちが自分で調査して予定を組んで実施しています。学園での一日の過ごし方も、朝スケジュールを確認をしてから始まるため、自分で時計を見て休み時間も切り上げ次の教室移動も自ら行って着席しています。誰かに言われてやるのではなく自ら考え行動する。生きる上で大切なスキルを身に付けていました。

子どもが在籍している学校には月ごとに出席日数を報告し、担任と連携をとっています。

コクレオの森はこども基本法を主とした子ども中心の教育を実施しており主権者として社会を作り生きていくことの大切さを教えています。多種多様な価値観があり、インターネットを通して様々な

情報に触れる機会が多くなったなか、学校教育の在り方も大きな転換期を迎えています。ニーズが多様化しており学校教育もその多様性に追いついていけるように考えていくことや、子ども基本法、子どもの権利条例、教育機会確保法など子どもの権利と主体性を育み、平等な学びの保障、子どもをど真ん中に置いた学びや支援体制の確立が急務であると考えます。

フリースクール等は公立ではないため費用負担も大きいですが、全国では8自治体が独自の制度を作りサポートしていることから那須塩原市においても市独自の補助を考える時ではないかと考えます。

